

佐賀からのたより

カチガラスと七夕

艶島 敏昭

この地に始めて足をふみこんだ私を、一番最初に出迎えてくれたのは、始祖鳥//カチガラスでした。一瞬、息をのみ、ブレーキを踏んで “なんで！ こんなところに始祖鳥が// …… その鳥は、まるで理科の教科書から抜け出してきたかのように、しかし、平然と私の前に舞いおりてきたのです。

噂に聞いたことのある、これがカチガラスとか言う鳥らしい、と気がつくまでの何と長かったこと。確かに、翼の途中に手が見あたらぬ。

逃げないうちに、カメラを出して…… とにかく、大発見には違いない。などと今思ひだしでも、とてもスリリングな出会いでした。

ご当地、佐賀では何の変哲もない鳥なのに、日本でも、この付近だけにしかいない鳥だそうで、生態などもはっきりしないという。名前は“カラス”だが、実は“カササギ”なのだろう。もちろん“カササギ”は日本ではここにだけ生息していることになる。

飛んでいるとき、菱形にひらく“しっぽ”が “始祖鳥” に見えた原因だと、少し後で気がついた。

仕事上、この付近の軟弱地盤には悩まされる。

若かりしころ学んだ地質学を頼りに、並はずれた軟らかさを理解しようと思い、目につけた本を買いこんできた。その名も“有明海”。

何度も、何度も、立ち読みをした本であり、とても気に入っていたが、唯一、カチガラスの項目

がないのが不満で購入しないでいた。しかし、最近、軟弱地盤とのつきあいが増えてきたので、しかたなく（？）購入してかえった。

そうしたところ、"カササギ"という項目が、目次のなかにあるではないか！

そうだ！ からがらすニ カササギ だと知ったのは、つい最近のことだったのだ。

カシャ カシャ、 カシャ カシャ と鳴くこの鳥を見たことはないだろうのに、カササギの名だけは、かなり昔から日本中で知られていたらしい。

なぜだろうか？？？

その答えが、この本に記されていた。

驚いたことこれ、それ、 ジム というのです。

年に一度の七夕の夜に、牽牛と織女の二つの星が、天の河を渡って逢うときに、他でもない"カササギ"が、天の河に翼の橋をかけて逢瀬を助けるという……

小倉百人一首にも、大伴家持によって歌われているそうです。

そういうえば、何となく聞いたことのあるような……

白鳥座は、中国ではカササギに見ててていたのか！

これからは、からがらす座と呼ぶことにしようかな？！

それにしても、佐賀と星との間にこんな縁があったなん



天文ガイド『読者の天体写真』にみる

アマチュア天体写真の変遷

長谷 美治

次に、赤道儀及び手動ガイドの割合について調べたのが図2です。なお、反射と屈折の割合についての比較も示しました。この図により手動ガイドの割合の急激な減少は全く予想どおりで現在では5%以下まで下がっていました。以前は小型機用のモータードライブはほとんどなく、あっても精度が悪かったり大変高価だったのが現在では高精度のパルスマータードライブ装置が1~2万円で買えるのですから無理もないでしょう。自作機の減少とともに無精な天文ファンが増えたということ。
しかし、一番根柢的な仕事は機械にまかせて自分は星を楽しむというが本当なのかとも思えます。

赤道儀の増加も天体写真を写す以上、当然の成り行きでしょう。70年代後半から望遠鏡といえば自動赤道儀というのが常識になってきたようです。

以前は屈折望遠鏡が6割程度を占めていましたが、最近は5割以下に落ち込んでしまっているようです。原因ははっきりしませんが、「大きい口径が欲しい」という心理と反射系天体カメラによる写真が増えたことによるものではないかと思います。60年代に比べ70年代半ばの方が屈折の割合が多少大きいのはボタ赤による写真がそのころ増加してきたことによるものかもしれません。

次に図3についてですが、これは撮影に利用された望遠鏡のメーカー別によるシェアの比較です。この図により自作機の減少と高橋製作所の発展の様子が一目瞭然となります。ただし、前にも記したように67年までの写真のデータは不備な点が多く、基礎となる分母が小さくてあまりアテになる結果がでているようには思えません。ちなみに応募規定に望遠鏡のメーカー名も記すように、となったのは67年4月からで応募用紙が付くようになったのは68年5月からです。

自作機の減少の理由は高度経済成長によって天文ファンも金持ちになった、ということでしょう。又、メーカーの作る機材の品質が非常に向上し、アマチュアがわざわざ作るよりむしろ安上がりで高精度のものが手に入るようになってしまったことも一因と思われます。以前はポータブル赤道儀といえばもっぱら自作で製作記事もよく載ったのですが最近はこの分野でもメーカーがよい品を売り出すようになってしまい自作する意義があまりなくなってしまったようです。ただし、この図において自作とは架台のことと鏡筒部だけ自作の場合には自作には分類していません。鏡筒部の自作は最近もかなり多いようです。

高橋製作所の65mm屈赤の広告は67年11月から登場し、68年12月に初めて「読者の天

「天体写真」にデビューして以来急激にシェアを伸ばし 76 年にはついに 5 割を越え、その後も 4 割前後のシェアを保っているようです。多くのメーカーの中でタカハシだけがこのように成長することができた理由はいくつか考えられますが、その一つとしてタイミングよく 68 年 2 月号で天体望遠鏡テストに取り上げられかなりいい評価がなされたことは、この会社にとって大変幸運であったものと思われます。広告の写真のいかにもガッシリしているという印象も、また 6 cm より 0.5 cm 大きい口径も当時としては魅力的であったろうと思われます。当時は 6 cm 級の赤道儀の広告はあまりなく、しかもろくなものがなかったという状況も TS 式 65 mm が目立った理由になるでしょう。なにしろ 6 cm に 200 倍～400 倍をかけ、しかも高倍率を最大の宣伝文句にした広告が氾濫していた時代ですから。又、ある程度以上「読者の天体写真」の写真データや他の記事中に TS 式の名が出るようになるとこれがかなりの宣伝効果を持つことになったろうと思われます。もちろん、この会社がその後どんどんとユニークで天文ファンの欲求を先取りした製品を開発していくたといふ企業努力が現在の地位を築き上げた最大の要因であることは間違ひありません。とくにセミアポクロマートの安価発売と高精度の専用モータードライブ装置の開発、そしてポータブルを目的とした小型赤道儀の発売はタカハシの地位を決定的にしたものと思われます。

77 年以後、高橋製作所の伸びが止まりむしろ多少の減少傾向に転じた理由の一つには五藤光学のマーク X システムの発売があると考えられます。確かに多目的システム赤道儀という発想は他のメーカーにとってかなりのショックだったらしく、いくつかのメーカーもすぐにマッチプレートを載せるという形で追随したことでもそれがわかります。ただマーク X 以後、小型機部門ではあまり目立った動きをしていないせいか、五藤光学はその後再び減少の傾向を示しているようです。

そのほか、日野金属やビクセンもいろいろとユニークでレベルの高い製品を出すようになり、しだいにシェアを伸ばしているようです。日本光学や旭光学も小型高級赤道儀を出すようになった現在、タカハシが再び 5 割を超えるシェアを得ることは不可能ではないかと思います。タカハシはしだいに大型機にも手を出そうとしているようですが、すでに 15 cm 級ではかなりの伸びを示していますが大型機分野でどれほど伸びることができるか興味のある所です。なお、ニコンについては 70 年代前半までの分は公共天文台の機器によるものも多いようです。

図 3 ではアストロ光学の割合がしだいに小さくなっているようです。この理由はよく分かりませんがハデな広告や目立った新製品を出していないせいかもしれません。

20 cm 以上の分野ではミカゲ光器が伸びてきているようです。やはり価格の割りに、精度がよく架台ががっしりしていてデザインもいいせいでしょうか。なお、日本特殊光学については鏡筒部だけなので赤道儀メーカーとの重複も多少あります。シュミットやライトシュミットに関してはこの

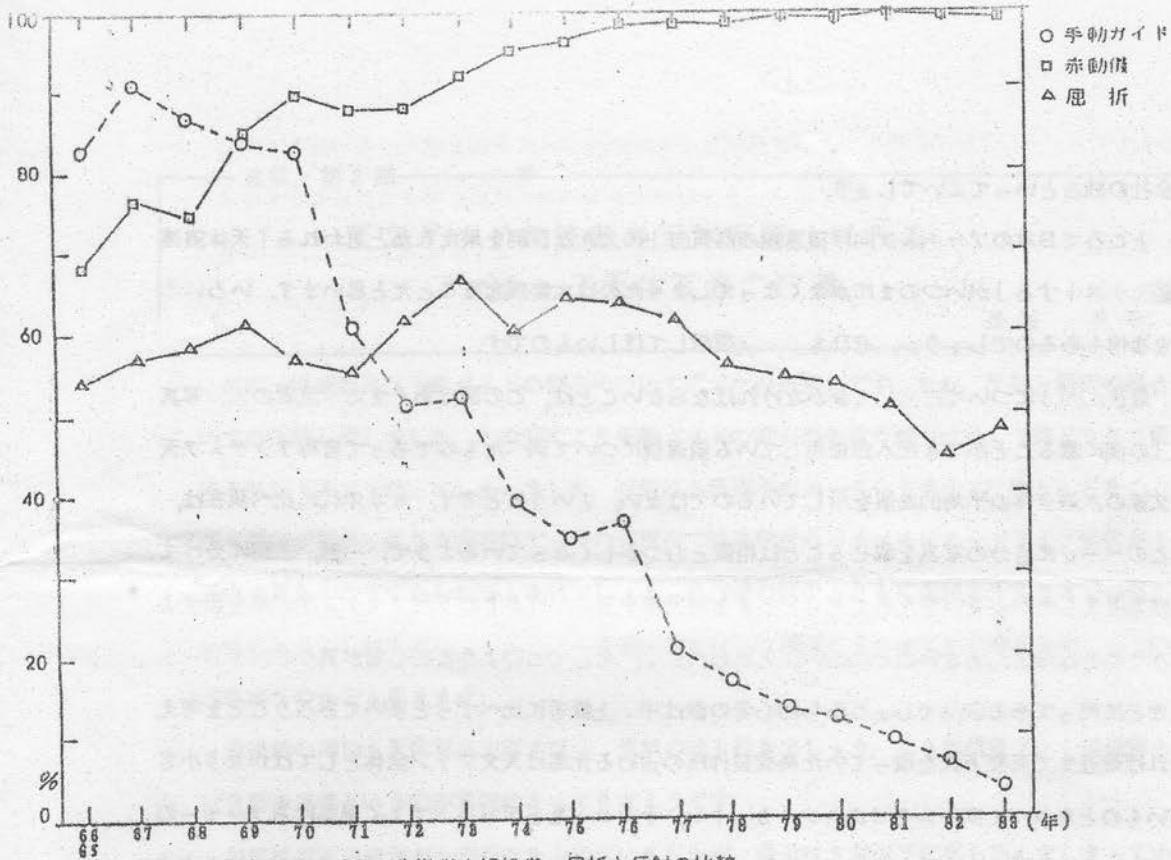
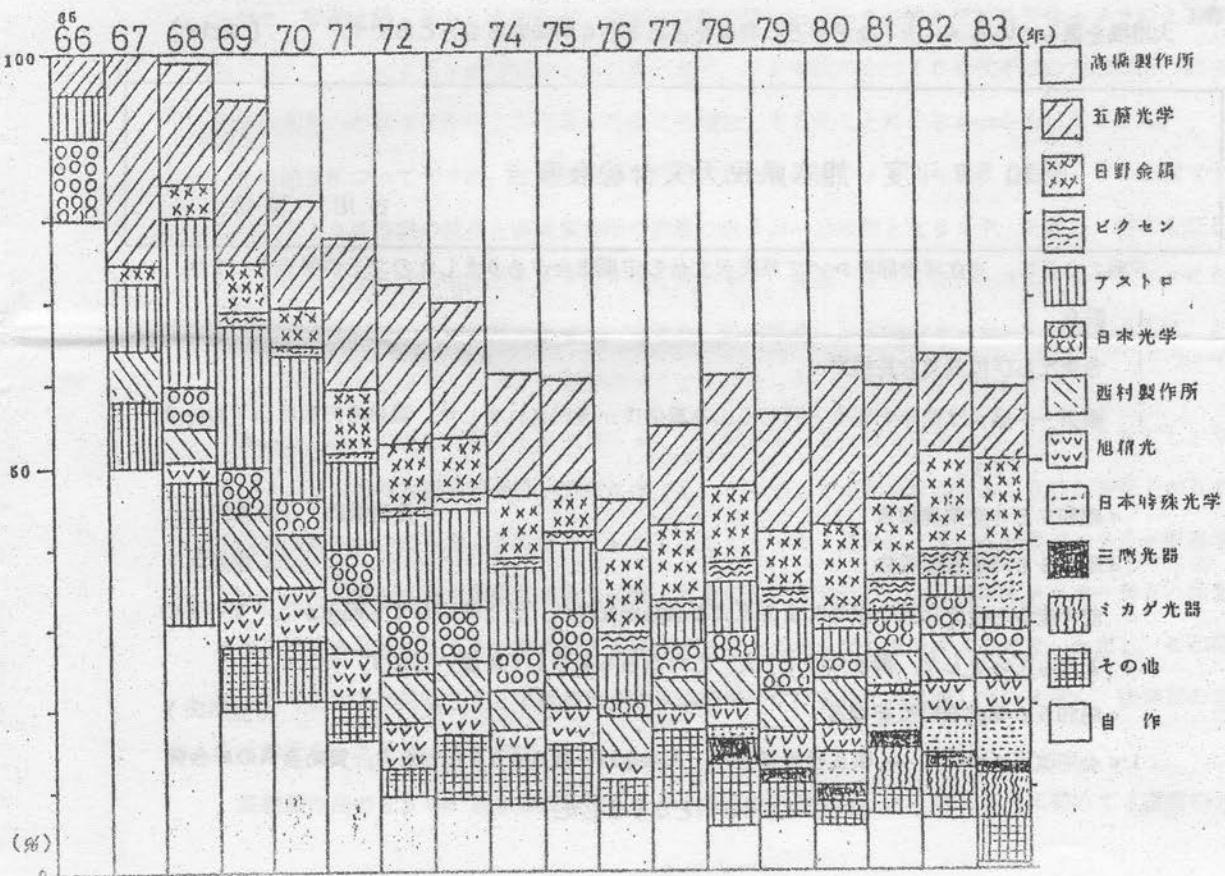


図2 手動ガイドと自動ガイド、赤動儀と経緯儀、屈折と反射の比較



会社の独占といつてよいでしょう。

ところで日本のアマチュア向け望遠鏡の品質向上に大きな役割を果たしたと思われる「天体望遠鏡をテストする」がいつの間にかなってしまったのは大変残念なことだと思います。いろいろな事情もあるのでしょうか、ぜひもう一度復活してほしいものです。

最後、図3について注意しておかなければならぬことは、この図はあくまで「読者の天体写真」の欄に載ることができた人が使用している望遠鏡について調べたものであって自称アマチュア天文家の人们全体の平均的な値を示しているのではない、ということです。60年代に比べ現在は、このページに自分の写真を載せることは格段とむづかしくなっているようで、一部、二部に分けてはありましたがあまりも小遣いをためてやっと小さな望遠鏡を買ったばかりの初心アマチュアが額を出すようになったことはほとんどないのではないかと思われます。そしてこのような初心者が買るのはデパートなどに売っている製品でしょうから初心者の数は中・上級者に比べずっと多いであろうことを考えれば最近まで直売方式を取っていた高橋製作所の占める比率は天文ファン全体としてはかなり小さいものとなり、ミザールやビクセン、カートン、ケンコーなどデパートでよく見かけるメーカーの製品がかなり大きな割合を占めることになるだろうと思います。また、数ではなく売り上げの点で大型機を扱っているメーカーなどがどの程度を占めるかも興味のあるところです。 (つづく)

昭和59年度 熊本県民天文台総会報告

古川 英生

5月20日に、市立博物館において県民天文台の定期総会がありましたのでその報告をします。

1. 開会

1. 台長ならびに名誉台長挨拶

1. 議事 ——議長は前年度総会と同じく山本重信氏が選出されました。議事の内容は以下の通りです。

◦昭和58年度業務報告

(片野坂氏、小林寿郎氏)

◦昭和58年度会計報告

(永井氏)

前年度からは立川氏の指導により正式な会計がなされ、どこに出しても恥ずかしくないものとなっていました。御苦勞様でした。これからもよろしくお願いします。

◦昭和58年度会計監査報告

(立川氏)

1. 会則改正について —— 改正は承認され、入会金は一律3000円となり、賛助会員の年会費が1口5000円となりました。

◦役員改正——台長は前年度と変わらず宮本氏が、そして他の役員は宮本氏より委嘱され決定しました。役員は以下の通りです。

◦名誉台長 宮部 末雄 ◦台長 宮本 幸男 ◦副台長 小林 寿郎 永井 剛
◦常任理事 工藤 哲生 小林 昌樹 下郡 慎太郎 中川 裕 成松 和夫
◦理事 荒井 賢三 立川 正之 堀田 守男 松下 太 松原 弘幸
元島 威 矢住 幸生 山本 豊信 山本 遼 渡辺 和宣
◦監査委員 立川 則之 西村 幸男

◦新台長挨拶 (宮本氏)

◦昭和59年度事業計画 (松下氏)

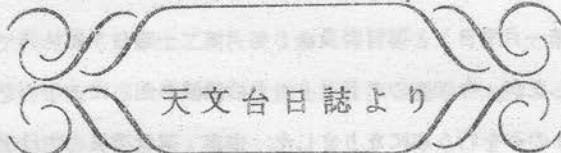
こので8月3日～5日に南阿蘇国民休暇村で開かれる『星を育む会』についての質問がありました。詳しくは星語を参照して下さいとのことでした。

◦昭和59年度予算案検討 (小林昌樹氏)

◦その他

1. 閉会

この後ビデオで県民天文台の開所式や宮本氏のテレビ出演などを見せて下さいました。



4/8 月令7の月が天頂に近く鉛い光を放っていた。これが本当の“おぼろ月”と言うのだろう。花見をよそに、静かに月を愛でるのも風流である。 (宮本)

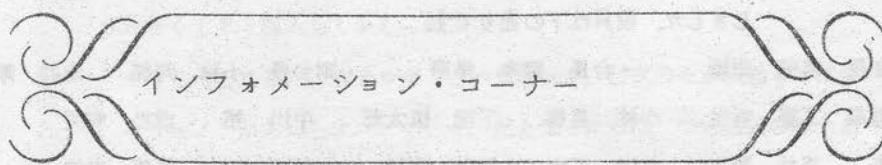
5/12 本日は運営委員会。議題——城南町の予算、総会の進行,
etc. (くるみ)

5/17 熊日の火星接近の記事により来台した人が殆どでした。特に大シルチスの見える今が goodと宮本氏が書いたとか。 (Ho)

5/23 来台者がやたら多い(32名)。マスコミの力／きつかった～。But, 火星、土星の見え味は最々々々高～～～。特に土星はこれこそ土星！今まで見たどの土星よりも見えた。土星ちゃんかわいい～～～～。 (成松)

5/26 今日は「星を楽しむ会」～(火星・土星観望会)～、いつもは見慣れない顔もちらほら。疊ってしまって火星は時々しか見えない。でも、SeeingはGood！ (下郡)

5/31 鹿児島・宮崎は本日梅雨入り、熊本も梅雨入り間近。今年の梅雨は陽性だと、天気予報は当たるでしょうか？梅雨の間に天文ファンは何をするか？？ (小林M)



—☆一 昭和59年度の会費納入についてのお知らせ

昭和59年度の会費を同封してある振替用紙にて納入して下さい。会費は下の通りです。なお、納入期限は7月末日です。お忘れなく。

正会員 6000円(半期の分納ができます。) 友の会会員 3600円

—☆一 『星を楽しむ会』

・とき：7月28日(土) PM7:00より ところ：県民天文台にて(雨天・曇天決行)

観望対象：木星、土星、火星、夏の星雲・星団 etc. . .また、この日はみずがめ座流星群の極大の前日にあたり、やぎ座流星群も活動しているので流星もたくさん見る事ができると思います。ぜひ、多数の御参加を!

—☆一 理事会、運営委員会についてのお知らせ。

これまで、KOAOでは理事会(毎月第一月曜日)と運営委員会(毎月第二土曜日)に於いて運営に関する事柄の決定等を行ってきましたが、今年度の7月より労力の節減のために理事会を取り止め、運営委員会(毎月第二土曜日)のみを行う事になりました。理事・運営委員の方は御注意を。



星屑の120号をお届けします。厭な梅雨の季節がやってきました。星空を見る事もできない、その上、自転車で大学に通っている私にとって一層鬱陶しい時期なのですが、こんな時期には何をすればいいのか. . .?

(HAR)

熊本県民天文台機関誌「星屑」 1984年6月号 通巻第120号 6月30日発行

発行所・熊本県民天文台 TEL 861-42 熊本県下益城郡城南町藤山

TEL 096428-6060

[熊本県民天文台事務局 TEL 860 熊本市古京町3番2号 熊本博物館内
振替 熊本8-24463 TEL 096-324-3500]

編集担当/HARADA